

親鸞仏教センター通信

2007.
June

2007年6月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第22号

「仕事のやりがい」という問い

親鸞仏教センター研究員 高 海 史

『若者はなぜ3年で辞めるのか』(城 繁幸 集英社)という本がある。この本は書名が示すように、最近の若者は会社に就職しても約3年で退職し、別の仕事を求める人が増えてきている、と警鐘を鳴らしている。同書によれば、そうした動向と連動して、日本における転職市場は1990年代後半から10倍近くに伸びているそうだ。そして、肝心の、なぜ若者は短期間で仕事を辞めるのかと言えば、自分の置かれる状況に鑑みて、いましかできない仕事のやりがいを求めるからだ(取意)、と著者は指摘する。

この本を読みながら、ふと、もうすぐ僧侶になろうとする人、もしくは僧侶になったばかりの人との会話を思い出した。「実は、お寺を継ぎたくないんだ」「適性があるように思えないし、他の仕事に就こうかと迷っているんだ」と。もちろん、お寺の場合は、いわゆる会社と同列にして考えることには問題があるかもしれないし、実家がお寺の場合には、退職・転職というのは、実際に容易なことではない。それに、上記のような発言をした人の多くは、その後、お寺の仕事に意味を見だし、従事している。だから、ここ数年、会社で起こっている若者の退職・転職事情とは、現象面としては違ったあらわれをしている。

しかし、「本当に、自分はどんな仕事をしたいのか」という問いかけは、会社員であろうと、僧侶であろうと、どんな仕事をしていても、誰もが抱く、共通した問いと言ってよいだろう。もちろん、この問いは昔からあったと想像されるが、物質的に満たされた現代において、フリーターでも食べていける環境が整って、よりはっきりしたかたちで浮かび上がってきた問いだと言えよう。おそらくは、昨今言われる個性・自分らしさ、スピリチュアリティの関心なども、この仕事への問いと無関係ではないだろう。どれも根っこはつながっているように思える。では、その根っこは何か。つまり、「自分はどうかりたいのか」という問いこそが、仕事への問い、個性・自分らしさ、スピリチュアリティの関心として表出してくると考えられるのではないだろうか。だとすれば、この根っこの問いは、まさに仏教によって問われ、育まれてきた人生観とも重なってくる。

私は、電車を利用して通勤に2時間かけているが、三十歳代半ばの同世代、もしくは少し年下の世代のサラリーマンを眺めながら、彼らの内面を想像することがある。同じ通勤列車の車内にいて、そして見知らぬ人ではあるが、もしかしたら、求めている問いは仏教が扱ってきた問いと通じているかもしれないと考え、と、「仏教に縁のない若者には、何も伝えられない」とあきらめてしまうわけにはいかない気がしてくる。「仕事のやりがい」という問いは、人生の問いと無関係ではないし、そういう現代だからこそ、問いを起こす人にとって、親鸞仏教が大きな力となり得るように思われてならない。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」

宗教的な真実に出^で遇^あう

—かくの如くに自分は聞いた—

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第4回と第5回が、東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第4回並びに第5回では、「普賢大士^{ふげんだいじ}の徳」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第3回からその一部を紹介する。

(嘱託研究員 越部良一)

■「仏説」—生きた宗教体験の伝承

『仏説無量寿経』（『大無量寿経』）という經典、經典には必ず「仏説」とつくといってもよいわけですが、仏陀の説法です。この『無量寿経』の教主世尊^{きょうしゆせそん}は、釈迦牟尼世尊^{しやくかにんじ}で、釈迦牟尼世尊の説法ということになるわけです。しかし經典というものは、語られた方が書いたものではない。釈尊が亡くなられたあと、語られた言葉を聞いた人、つまり、お弟子方が集まって編集した。お釈迦さまがこういう言葉で語ったということを誰が証明するかと言えば、聞いた方がお互いに、「あの会座^{えざ}では、あの場所では、こういうことをおっしゃった」「ああ、そうだそうだ」ということで編集していった。そしてまた、お釈迦さまは衆生を救うために、「対機説法^{たいきせつぽう}」と言われますけれど、相手を見ながら、その人その人に応じた言葉を探して、語りかけられた。ですから、人によって、場所によって、教えの言葉が違ふ。そういうことで、教えの内容は、さまざまな可能性、さまざまな方向性を最初から孕^{はら}んでいたと思われます。

聞いた人の耳に残った言葉があるわけです。聞いた人が、「私は、このように聞いた」と。聞いた人が理解した限りにおいて残る。ですから、もし“お釈迦さまという歴史上の人物が説いたことだけが仏説だ”という、そういう考え方であつたら、仏説というのはどこにもないわけです。お釈迦さま自身が、「私が、そう言ったよ」ということがないのですから。タマネギではありませんけれど、後からついたものは全部不純だから外していって、一番最後に残ったものが純粹だという考え方で、もし仏説を、衣を脱ぐように脱がしていったなら、何も残らないはずです。聞いたもの以外にはないのですから。それが、「仏説」というものの宿命です。

この『無量寿経』という經典は、原典研究とか文献学というような立場からすると、お釈迦さまが説いたはずがないと。大乘仏教が出てきた紀元前後ごろに、どこかで編集されたものであろうと。だけど、仏説は全部、聞いてきた伝承が伝えているのです。いわゆる文献学などからすると、古いものほど正しいという考え方で、そうではなくて、聞いた方が、仏陀が教えようとした方向性に向いてたすかったかどうか、それが、仏説が真実であることを証明する。そういうところに、仏説という言葉の不思議さがあるのです。

「仏説である」と、どこで証明するのか。誰も証明できないのです。伝承以外には証明できない。伝承が証明するということは、宗教的真理が伝えられ、それでたすかった人が、新しく生まれてきて、その人が、これが仏陀の説だと信ずるしかないのです。「ああ、これが

本当だ」と^{うなず}頷いてきた歴史が伝えるのです。つまり、宗教的真実というものは、言葉になって新しい体験を生み出してこそ意味があるのであって、言葉だけが^{のこ}遺って、新しい体験を生み出さないのであれば、それは死語です。教えにならない。いただいた方が、教えというものを証明していく。この『仏説無量寿経』も、「我^が聞^{もん}如^に是^ぜ」（『真宗聖典』1頁、東本願寺出版部）から始まります。生きた宗教体験の伝承、「かくの如くに自分は聞いた」という伝承が伝えてきているものが信頼されて、經典として伝えられてくる。そこに、大乘の經典ということがあるわけです。

いわゆる科学的な文献学のような、対象的な言葉の歴史とか、時代の特長とか、そういう資料探求の眼では、宗教的真実というようなものは、まるで求めようともしていないのかもしれませんが。宗教的真実というものは、もともと言葉にならなかったわけで、言葉にならないものを言葉にしたのだから、仏説の根源は言葉ではないのです。言葉をとおして、その根源的なものを「これだ」といただいてきた歴史が、「仏説」ということを仰ぐわけです。

■ 出世の大事

親鸞は、『仏説無量寿経』を釈尊の^{しゆつ せはん}「出世本懷」であると信じられた。この世に生まれた大事件、一大事、「出世の大事」というものを、親鸞という人は『無量寿経』の釈尊に見いだされた。

人間として生きて、何かいままでの人生と違う人生を感じるということがある。自分の人生だと言えるようなものに合う。自分の人生は無意味ではないか、むだではないかとまで思われていたのが、それに出合ったことによって本当に意味があると。そういう新しい人生を感じるということは、いろいろな因縁にあるかとは思いますが、宗教的な真実に出遇うということは、苦悩の行きづまりのような闇の中で、そういう新しい考え方、新しい眼、新しい人生観、世界観と言いますか、まったくいままでは見え

なかった新しい見方ができたという体験です。

この世に生まれて、闇の中に生きてきたような感じであったものが、明るみに出たという歓び。そして、それを人に説こうとまで思い立った、そういう内容に出遇った。それを「出世本懷」とか「出世の大事」という言葉が言い当てているのだと思います。親鸞は、『無量寿経』のなかに、そういう釈尊を見たのです。これは後を読んでいきますと出てきますが、阿難^{あなん}というお釈迦さまの弟子が、釈尊を光り輝くお姿として仰いだと。これが、釈尊がこの世に生まれた本当の意味なのだと。つまり、お釈迦さまは単に普通の言葉を吐きだしたのではない。光のようなはたらきをしたかった。光のような言葉を投げかけたかった。そういうふう^{こうげん きぎ}に親鸞という人は、「光顔巍巍」（同7頁）、釈尊のお顔が光り輝いているというこの經典の内容を、真実教の証明として『教行信証』^{きやうぎんしんし}「教 巻」（同152～155頁）に取り上げておられます。親鸞聖人からすれば、いろいろな仏説があるというよりも、これが出世本懷の仏説である。本当に、このこと一つを説くために、自分は一生を生きてきた。このこと一つのために、この世に生まれてきた。そういう歓びに輝くお顔で釈尊は説法を始められた。『無量寿経』は、そういう意味をもっている仏説なのです。

（文責：親鸞仏教センター）

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講（無料）いただけます。

記

日時：2007年6月 5日(火)午後6時30分～9時
7月17日(火) 同 上
8月27日(月) 同 上

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック

JR・地下鉄^{しうてつ}ともに「有楽町」駅より徒歩1分
参考図書：『真宗聖典』^{しんしゆ}（東本願寺出版部発行）

ご希望の方は、下記にてご注文ください。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

現代と親鸞の研究会・第23回

都市の記憶を継承する

～イタリアに学ぶ修復型都市再生～

建築家 民岡 順 朗



民岡順朗 氏

2006年9月16日、真宗大谷派蓮光寺（葛飾区）において、建築家の民岡順朗氏をお迎えして、「現代と親鸞の研究会」を開催した。民岡氏は、経済優先型の日本の都市計画に警鐘をならし、イタリアの「修復」の技法をはじめとした都市計画に学び、日本の都市の再生を提案している。ここにその一部を紹介する。（嘱託研究員 本多雅人）

■ 記憶を喪失した日本の都市

日本では、驚くほど「都市」という問題が議論されていません。福祉や教育、環境や経済、犯罪や防災の問題などは議論されても、都市の問題というのはほとんど出てきません。唯一、新聞などに登場するのは、「都市再生」という話題です。とは言っても、要は高層ビルを建て続ける、そして利潤を得るのは、デベロッパーとゼネコンだけというのが実態です。

近代都市計画が行きづまっている根本的な原因はいくつかあると思いますが、日本の都市は、人間ではなく、経済や産業にとって都合よくつくられています。こうした経済効率主義の考え方を、複雑系である都市に、単純に適用し、均質化していった結果、いわゆる都市の「風景」が喪失してしまったのだと思っています。そこには、個性がないというか、まとまりがない風景しかありません。日本の都市は、どこに行っても似ていて、差異を見つけないことはほとんどできません。都市計画のプロの視点から見ても、同じ基準でつくっているのではないかというくらいよく似ています。それが、日本の国土を埋め尽くすような状況になってきてい

るのです。そういうなかで育った子どもたちは、当然のことながら個性がありません。人間性というか、個性を抑圧するような状況の背景には、そういった都市の無個性化、生活の場の無個性化というバックグラウンドが横たわっているのではないかと。もっとその点を社会問題として焦点を当てるべきではないか、というのが私の考え方です。

「風景」とは、その地域の自然物や人工物など、さまざまな物質的側面を結びつけているだけでなく、人びとの歴史や文化をも束ねているので、社会を形成する大きな役割を担っていると言えます。風景が失われていくとは、言ってみれば、「都市の記憶の喪失」です。また、歴史や文化が感じられなくなると同時に、人びとの絆が失われていくという、まさに現代の精神破壊の一因になっているのではないかと考えています。しかしながら、その風景の破壊を招いているのは、一人ひとりであって、風景の破壊を批判するまえに、自己を切開する必要があると思っています。他人ごとのように言うのではなくて、風景を破壊してきたのは、われわれ自身であるという認識が大切です。

近代的な都市計画を突きつめていくと、文明の危機の問題につながっていきます。ですから、日本の都市計画に関して、近代以前の伝統や、歴史や文化をもっと見直していくべきだと思います。そういうところに焦点を当てないと、地域の人びとにとっても、住みやすい都市にはなりません。

それに対して、例えば、イタリアの都市は歴史や文化を重要視します。生活を基盤とした人間重視の都市計画を進行させていますから、き

ちんとした都市の「風景」があるのです。そして、イタリアの都市はとても個性的であるだけでなく、都市計画が経済ニーズにもマッチしています。

■ 修復＝歴史的価値の保全と将来への継承に向けた処置

百年後の日本は、イタリア並みの人口（約6,000万人〈『日本の将来推計人口・人口問題研究所』〉）が予測されます。日本は、イタリアと地形的にも似ていますし、人口減少時代の都市を考えていく上で、コンパクトで集約型のイタリアの都市から学ぶべきことは多いと思います。

「チェントロ・ストリコ（centro storico）」という言葉がありますが、これは、「歴史的都心部」とか「歴史的な中心街」という意味です。たとえばフィレンツェでは、アルノ川の両側はかなり大きいチェントロ・ストリコで、これ全体が世界遺産に指定されています。チェントロ・ストリコの中には、市庁舎、教会、広場、貴族の邸館や美術館・博物館、古い街路や公園など、さまざまな歴史的施設が集積しています。これはローマでも、ナポリ、ミラノ、ヴェネツィアでも同様です。ただ古いエリアで観光客が集まっているというだけでなく、現在でも多くの人が住み、政治・経済・文化活動が営まれる「生活の舞台」となっています。

さて、「修復」という言葉がありますが、これは、「壊れたものの機能を回復してきれいに直す」という、いわゆる「修理」とは違います。そうではなく、美術作品や建築、都市などの「歴史的価値の保全と将来への継承に向けた処置」を意味します。ですから、特に問題がなければ、そのときの状態のまま「保存」とするという考え方です。チェントロ・ストリコの修復も同様で、そこに住んだり、そこで活動している人びとの生活の持続を前提に、まちを保全していこうというものです。

「修復」は、イタリア語で「レスタウロ（restauro）」と言い、「レストラン（restaurant）」と親類関係にある言葉です。レストランが、元来、「食を通じて人を癒す場」を意味

していたように、都市のレスタウロとえば、「都市を癒す」行為と表現することもできます。

イタリアの都市計画は、百年先、二百年先を考えながら、先人たちがつくり上げた過去の形を大事にし、その価値や意味を現代生活に活かしていくことを前提にしています。歴史的記念物の保存をきっかけにしながら、いわば「自己治癒力」に訴えるように、都市計画を行っているのです。

ところが、日本の都市計画は「対処療法」です。そうではなくて、イタリアの修復型都市再生に学びながら、季節感や身近な自然を大事にするなど、日本人独自の「癒し」の伝統を、もっともっとまちづくりに取り入れていくべきではないでしょうか。

いま日本の都市再生に求められていることは、歴史性の微かな痕跡でも再発見し、保存・修復することで、都市の記憶を再生することです。そしてそのことを通じて、都市に対する人びとの記憶を回復し、みんなが共有できるようにすることではないかと思っています。

（文責：親鸞仏教センター）

※民岡順朗氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第14号（2008年3月1日号）に掲載予定です。

民岡 順朗（たみおか じゅんろう）建築家
1963年、埼玉県に生まれる。早稲田大学理工学部建築学科卒業。株式会社オリエンタルコンサルタンツ都市・景観グループリーダー、技術士、一級建築士。98年、イタリアに留学。フィレンツェ、ローマで修復の理論と実践を学び、2001年に壁画修復コースを修了、ラツィオ州認定のディプロマを取得。01年から03年、リニャーノ・フラミーニオ市、ヴィテルボ市、サン・クイリコ・ドルチア市にて、壁画修復実務に従事。03年に帰国。著書に『絵になる』まちをつくる—イタリアに学ぶ都市再生』（生活人新書 NHK 出版）がある。



「現代と親鸞の研究会」（葛飾区の蓮光寺で）

三番 住蓮房
四番 安楽房

二位法印尊長之沙汰也。

親鸞改^{しんらん}僧儀^{そうぎ}賜^{たま}俗名^{よふな}、仍^{よつて}非^{あら}僧^{そう}非^ふ俗^{よふ}然^{しか}間^{かん}以^い禿^く字^じ為^な姓^{せい}被^お經^{きやう}奏^{そう}問^{もん}一^{いつ}畢^ひ彼^か御^お申^{もう}狀^{じやう}于^{こゝ}今^{いま}外^げ記^き序^{しよ}納^な云^ん々^々
流罪^{りゆうざい}以後^{いご}愚禿^ぐ親鸞^{しんらん}令^{しんらん}書^か給^{たま}也。

右斯聖教者、為当流大事聖教也。

於無宿善機、無左右不可許之者也。

釈蓮如御判

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

『歎異抄』の現代語訳を終えて

親鸞仏教センター元嘱託研究員 武田定光

五年半(二〇〇二年一月十五日から二〇〇七年六月一日)にわたって、『歎異抄』の現代語訳の作業をおこなってきた。この間には、研究員の顔ぶれも代わり、時代の変化もあった。月に二回から三回の定例研究会には、親鸞仏教センター職員全員が参加して作業に当たってきた。ここに、本紙第二十二号をもって掲載をすべて終えることになった。

今後、この成果を何らかの形にまとめていかなければならない。その方向性をもって新たな胎動が始まっている。今回、共同作業で現代語訳をおこなうということの意味が、あらためて教えられた。ひとつには、意識(翻訳)の深度をどのあたりに設定するかという問題である。宗教語を現代語に意識することは、本質的に不可能である。その不可能さを知りつつ、現代語に意識するにはどうしても、翻訳をおこなうことになる。単に古語を現代語に意識しただけでは済まない問題が起こってくる。そうすると、宗教語を現代の思想用語から意味づけて翻訳する作業になる。それを押し進めていくと、「鹿を逐う者は山を見ず」ということになる危険性がある。そんなときには再び山を出て、遠くから山を眺め直さなければならなかった。

もうひとつは、翻訳作業は個人でおこなうもので、共同作業には限界があるのではないかとという問題である。出版状況を見ると、個人訳が共同訳を圧倒している。個人訳は、ひとえに個人の読み込みに偏る傾向がある。それが魅力でもある。その点、共同訳は個人への偏りが修正されるが、思い切った訳語が付けにくいという問題も起こる。脇本平也先生からは、共同で意識作業をおこなうことで、「共同としての個」というものが誕生するのだ、と教えていただいた。これは、釈尊の語った「無我」ということに通じる。つまり、各人の脳が共同することで、大きなひとつの脳となり、課題に取り組むわけだ。もともと自我という実体があるわけではない。果実としての現代語訳を眺めてみると、そこには、まさに「共同としての個」が表現されているように思える。

「禿」の字を姓として朝廷に申し出て認められた。そのときの上申書は外記序に納められている。

流罪以後、愚禿親鸞と名のられたのである。

この聖教は、当流ではとても大事な聖教である。

宗教的感性の未だ育っていないものには、むやみに勧めるべきではない。

釈蓮如(花押)

語 註

⑩【辺地】方便^{へんぽう}土^どの別名。第十一条の語註(「辺地憊慢疑城胎宮」)『通信』第十二号)、第十六条の語註(「辺地」)『通信』第二十号)第十七条の語註(「辺地」)『通信』第二十一号)を参照。

⑪【後鳥羽院御宇】天皇としての在位期間に、上皇として院政を敷いていた期間を含めて「御宇」という。

(訳・語註…親鸞仏教センター)

『歎異抄』 試訳 〈後序〉 その3

原文

これさらにわたくしのことばにあらずといえども、経釈のゆくじもしらず、法文の浅深をこころえわけたることもそうらわねば、さだめておかしきことにてこそそうらわめども、古親鸞のおおせごとそうらいしおもむき、百分が一、かたはしばかりをも、おもいいでまいらせて、かきつけそうろうなり。

かなしきかなや、さいわいに念仏しながら、直に報土にうまれずして、辺地にやどをとらんこと。一室の行者のなかに、信心ことなることなからんために、なくなくふでをそめてこれをしるす。なづけて『歎異抄』というべし。外見あるべからず。

後鳥羽院御宇、法然聖人他力本願念仏宗を興行す。于時、興福寺僧侶敵奏之上、御弟子中狼藉子細あるよし、無実風聞によりて罪科に処せらるる人数事。

一 法然聖人並御弟子七人流罪、また御弟子四人死罪におこなわるるなり。聖人は土佐国番田という所へ流罪、罪名藤井元彦男云々、生年七十六歳なり。

親鸞は越後国、罪名藤井善信云々、生年三十五歳なり。

浄円房備後国、澄西禅光房伯耆国、好覚房伊豆国、行空法本房佐渡国、幸西成覚房・善恵房二人、同遠流にさだまる。しかるに無動寺之善題大僧正、これを申しあずかると云々

遠流之人々已上八人なりと云々

被行死罪人々。

一番 西意善綽房

二番 性願房

現代語訳

以上、述べてきたことは、決して私の勝手な言説ではないが、經典や注釈書に書かれた筋道も知らず、教説の浅深をも心得ていない私なので、きつと理解のあやしいところがあるかもしれない。しかしながら、いまは亡き親鸞聖人の語られた教えのほんの一端を、思い出して書きつけたものである。

まことに悲しいことではないか、幸いにも念仏しながら、直ちに真実の浄土へ生まれずに、方便の辺地にとどまることは。同じ念仏の教えに集う求道者のなかに、信心が異なることのないように、泣く泣く筆をとってこれを記した。名づけて『歎異抄』という。むやみにひとに見せるものではない。

後鳥羽上皇のご治世のころ、法然上人が他力本願念仏を宗とする教えを世にひろめられた。そのとき、興福寺（奈良）の僧侶たちが敵視して朝廷に上訴した。法然上人の弟子たちのなかに、無法な振る舞いをしたという、事実無根の噂により処罰された人びとの数は、次のとおりである。

一、法然上人とその弟子たち七人は流罪。また四人の弟子たちは死罪に処せられた。法然上人は、土佐の国（高知県）の番田というところへ流罪。罪人としての名前は藤井元彦、男などであり、年齢は七十六歳であった。

親鸞は越後の国（新潟県）へ流罪。罪人としての名前は藤井善信、などであり、年齢は三十五歳であった。

浄円房は備後の国（広島県）、澄西禅光房は伯耆の国（鳥取県）、好覚房は伊豆の国（静岡県）、行空法本房は佐渡の国（新潟県）。幸西成覚房と善恵房の二人は、同じく流罪に決定されたが、無動寺の前の大僧正（慈円）が申し出て、二人を預かることになったという。

流罪に処せられたひととは八人であり、

死罪にされた人びとは、

一、西意善綽房

二、性願房

三、住蓮房

四、安楽房であった。

これは二位の法印尊長の裁定で行われた。

親鸞は僧の身分を捨てさせられ罪人としての名前を与えられた。これによつて「僧に非ず俗に非ず」と宣言されたのである。このようなことで、

もって存知せざるなり。そのゆえは、如来の御ころによしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」とこそおおせはそうらしいしか。

まことに、われもひともそらごとをのみもうしあいそうろうなかに、ひとついたまじきことのそうろうなり。そのゆえは、念仏もうすについて、信心のおもむきをも、たがいに問答し、ひとにもいいきかするとき、ひとのくちをふさぎ、相論をたたかいたんがために、まったくおおせにてなきことをも、おおせとのみもうすこと、あさましく、なげき存じそうろうなり。このむねを、よくよくおもいとき、ころえらるべきことにそうろうなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

来が知っているほどに善を知っているのであれば、私は善を知っているともいえよう。また、如来が知っているほどに悪を知っているのであれば、私は悪を知っているということもできよう。しかし、あらゆる煩惱が具わっている私たち、そして、まるで燃えさかる家のように激しく移りやすいこの世界は、すべてが嘘偽りや絵空事であって何ひとつ真実はない。ただ南無阿弥陀仏だけが真実なのである」と。

私もひと、つくづく虚言ばかりを言い合っているなかで、ひとつ殊に痛ましいことがある。というのは、念仏するについて、信心のありようを互いに議論したり、ひとに説き聞かせるとき、ひとの口をふさいで論争に勝とうとするために、まったく親鸞聖人の語られなかったことを、これぞ聖人のお言葉であると主張する者がある。これは、なんとも浅ましく歎かわしいことである。このことをよくよく了解し、心得ていただかねばならない。

語 註

⑧【善導】大業九(六一三)年・永隆二(六八二)年、六十九歳没。中国唐代の浄土教の祖師。

⑨【自身はこれく身としれ】善導の著した『観無量寿経疏』『散善義』に由来する言葉。浄土真宗においては、「機の深信」と呼ばれ、特に大切に受け取られてきた。

(訳・語註…親鸞仏教センター)

『anjalī』第13号および

『現代と親鸞』第12号を刊行

このたび、情報誌『anjalī』第13号(写真上)、並びに研究誌『現代と親鸞』第12号(写真下)を刊行しました。

『anjalī』第13号では、精神科医の大平健氏、経済学者の由井常彦氏、物理学者の菊池誠氏、中国思想研究者の小島毅氏、哲学者の内山節氏、宗教学者の川橋範子氏、ジャーナリストの由衛辰寿氏、言語学者の小澤重男氏、大谷大学長の木村彰彰氏など、11名の各専門分野の方々に、現代社会・現代人の諸課題とその苦闘について、ご執筆いただいています。

一方の研究誌『現代と親鸞』第12号では、研究論文(寓海史研究員・山本伸裕研究員)のほか、「現代と親鸞の研究會」から医師の田畑正久氏、「清沢満之研究會」から東京大学大学院教授の竹内整一氏、「英訳『教行信証』研究會」から龍谷大学教授のヒロタ・デニス氏の講義と質疑。また、第4回「親鸞仏教センターのつどい」から医師の帯津良一氏と本多弘之所長の講演。さらに、「親鸞思想の解明」から本多弘之所長の問題提起(6講座分)を掲載しています。



『歎異抄』 試訳 〈後序〉 その2

原文

聖人のつねのおおせには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐そうらいしことを、いままた案ずるに、善導の、「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにせずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」(散善義)という金言に、すこしもたがわせおわします。

されば、かたじけなく、わが御身にひきかけて、われらが、身の罪惡のふかきほどをもしらず、如来の御恩のたかきことをもしらずしてまよえるを、おもいしらせんがためにてそうらいけり。まことに如来の御恩ということとをばさたなくして、われもひと、よしあしということとをのみもうしあえり。

聖人のおおせには、「善惡のふたつ総じて

現代語訳

親鸞聖人がつねづねおおせになっていたお言葉に「阿弥陀如来が五劫という長い時間をかけて、すべての存在を救おうという深い思いから建てられた誓願を、よくよくこの身に引き当ててみると、それはひとえにこの親鸞一人を救うためであったのだ。思えば、はかり知れない罪業をもったこの身であるのに、たすけようと思いつてくださった本願の、なんともつたいないことか」と、しみじみとご述懐されたことを、あらためて考えてみると、善導大師の「わが身は、現にこれ、罪深く迷いの多い凡夫であり、永遠の昔から、つねに苦悩の海に沈み、つねに生死の迷いに流転して、ついにこの闇から抜け出る手がかりのない身である、と知れ」という、あの尊い不滅の言葉と少しも異なったところがない。

このように受け止めてみると、もつたいないことだが、親鸞聖人がご自身をとおして、私たち自身の罪惡の深いことを知らず、また如来のご恩の尊いことをも知らずに迷っていることを、思い知らせようとするためだったのである。まことに私たちは如来のご恩ということを少しも問題にすることもなく、だれもかれもお互いに、善いとか悪いとかということばかり言い合っている。

親鸞聖人のおおせには「何が善であり、何が悪であるのか、私はまったく知らない。その理由は、如

親鸞仏教センターの動き

(2007・3・5) 一抄出

■2007年

- 3・1 「親鸞仏教センター通信」第21号を発行。
- 3・6 第23回研究会(研究・交流・出版)
- 3・7 第8回「唯信鈔文意」研究会
- 3・7 第2回研究員と読む公開輪読会「いま新たに聞く―ブッダ・法然・清沢満之の世界」(「選択本願念仏集」を読む)①③/7 ②③/14 ③③/22 ④③/28 (文京区・東京大学仏教会館2階ホール)
- 3・9 親鸞聖人ご命日のつどい
- 3・16 第57回清沢満之研究会
- 3・27 伊東恵深研究員に博士(文学)が学位授与される。論題「親鸞の浄土観―仏土開顕の思想的課題」
- 4・1 第5回(通算・第56回)「親鸞思想の解明」連続講座(東京国際フォーラム)
- 4・1 伊東恵深研究員が大谷大学非常勤講師に就任。人事発令(山本伸裕研究員、新たに田村晃徳嘱託研究員が発令)
- 4・13 第83回英訳「教行信証」研究会
- 4・20 親鸞聖人ご命日のつどい
- 4・24 第5回テーマ別研究交流会「ビーブルネス(民衆性)、サブシステンス(生命性)、スピリチュアリティ(霊性) 哲学者・花崎泰平氏(東京ガーターデンバレス)
- 5・1 第5回「親鸞仏教センターのつどい」記念講演「日本浄土系の思想と意味」文芸評論家・吉本隆明氏、「親鸞の人間像と時間」親鸞仏教センター所長・本多弘之(千代田区・学士会館「本館」)
- 5・8 人事発令(森野顕書記補)
- 5・10 第6回(通算・第57回)「親鸞思想の解明」連続講座(東京国際フォーラム)
- 5・11 人事発令(藤谷真之書記が退職)
- 5・15 第31回現代と親鸞の研究会「世俗の尊さ」と「宗教的時間」フォトジャーナリスト・藤田庄市氏(アルカディア市ヶ谷)
- 6・1 「EBC」第13号、「現代と親鸞」第12号、「親鸞仏教センター通信」第22号を発行。

なお、「いかでかその義あらん」という疑難ありければ、詮ずるところ聖人の御まえにて、自他の是非をさだむべきにて、この子細をもうしあげければ、法然聖人のおおせには、「源空が信心も、如来よりたまりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまわせたまいたる信心なり。されば、ただひとつなり。別の信心にておわしまさんひとは、源空がまいらんずる浄土へは、よもまいらせたまいそうらわじ」とおおせそうらいしかば、

当時の一向専修のひとびとのなかにも、親鸞の御信心にひとつならぬ御こともそうろうらんとおぼえそうろう。いづれもいづれもくりごとにてそうらえども、かきつけそうろうなり。

露命わずかに枯草の身にかかりてそうろうほどにこそ、あいともなわしめたまうひとびとの御不審をもうけたまわり、聖人のおおせのそうらいしおもむきをも、もうしきかせまいらせそうらえども、閉眼ののちは、さこそしどけなきことどもにてそうらわんずらめと、なげき存じそうらいて、

かくのごとくの義ども、おおせられあいそうろうひとびとにも、いまいよわされなんどせらるることのそうらわんときは、故聖人の御ころにあいかないて御もちいそうろう御聖教どもを、よくよく御らんそうろうべし。おおよそ聖教には、真実権仮ともにあいまじわりそうろうなり。権をすてて実をとり、仮をさしおきて真をもちいるこそ、聖人の御本意にてそうらえ。かまえてかまえて聖教をみみだらせたまうまじくそうろう。大切の証文ども、少々ぬきいでまいらせそうろうて、目やすにして、この書にそえまいらせてそうろうなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

だから昨今の、ひたすら念仏のみに生きるひとのなかでも、親鸞聖人の信心とひとつではないということもあるだろうと思われる。どれもみな同じことの繰り返しではあるけれども、書きつけたものである。

露のようにはいかないのちが、枯れ草のように老いさらばえたこの身に、わずかに残っているあいだに、ともに連れだつて念仏の教えを歩まれた方々の疑問をお聞きし、親鸞聖人の教えられた教えを、お話ししてお聞かせすることもあろうが、この私の日が閉じた後は、さぞかしさまざまな考えが入り乱れ、混乱することになるであらうと、歎かわしく思われてならない。

また、このような議論などを言い合っている人びとのなかにおいて、もしそのようなことで迷われるときには、いまは亡き親鸞聖人がお心に適つて用いられたお聖教などを、よくよくご覧になるがよい。およそ聖教には、真実がそのまま説かれた部分(真実)と、真実に導き入れるために説かれた部分(権仮)とがまじり合っているのである。そのなかから権仮の部分差し置いて、真実の部分を用いることこそが、親鸞聖人のご本意なのである。どうかくれぐれも、聖教を読み誤らないように注意していただきたい。そこで証文となる大切な証文などを少々抜き出して、わかりやすいかたちで、この書に添えさせていただくことである。

語 註

①【法然聖人】長承二(一一三三)年・建暦二(一一二二)年、八十歳没。親鸞の師である。法名は源空と言ひ、法然はその房号である。

②【親鸞】原文の「親鸞」という一人称の表記は、法然の門下において、すでに「親鸞」と名づけていたことの傍証と受け取ることできる。

③【善信】親鸞の房号。もともとは僧房の名であり、日常的には房号で呼び合う習慣があった。

④【勢願房】寿永二(一一八三)年・暦仁元(一二三八)年、五十六歳没。名は源智。法然の高弟。京都知恩寺・知恩院第二世。

⑤【念仏房】保元二(一一五七)年・建長三(一二五二)年、九十五歳没。法然の高弟。号は念阿弥陀仏。京都往生院の開基。

⑥【かくのごとくの義ども】聖教をみみだらせたまうまじくそうろう」までが、本来は「いづれもいづれもくりごとにて」の前に置かれていたのではないかとという錯簡説もある。

⑦【大切の証文】この証文が何を指すかは諸説ある。一、前半の十カ条(第一―十条)という説。二、「後序」のなかの二つの「おおせ」の文章という説。三、他に証文があったが散失したという説。

(訳・語註：親鸞仏教センター)

『聖典』の試訳（現代語化）

最終章は「後序」と呼ばれてきた。文章の構成は、まず師の法然と親鸞の信心がひとつであることを押さえ、さらに親鸞が語った「つねのおおせ（常の仰せ）」を記し、最後に『歎異抄』を執筆した理由が述べられる。師法然と親鸞の信心に変わるところがないということは、『歎異抄』全体が真実の教言であることを裏打ちしている。また、「つねのおおせ」は、親鸞直筆の他の文献には見ることができないものである。果たして、この教言は実際に親鸞が語ったものか、唯円の創作かはわからない。しかしそれは、どちらでもよい問題である。真宗が、よく表現されていれば、誰が語ろうが、それはよい。

『歎異抄』には、聖教の絶対化という陥穽をまぬがれる装置がある。それは「おおそ聖教には、真実権仮ともにあいまじわりそうろうなり。権をすてて実をとり、仮をさしおきて真をもちいるこそ、聖人の御本意にてそうらえ」である。たとえ、お釈迦さまが説かれたお経であつても、仮の部分とほんとうの部分があるのだから、仮の部分は差し置いて「真」を採用していけ、という。『歎異抄』には、誰が語ったかではなく、何を語ったかという「真」の文脈に着眼していけという鉄則がある。

（親鸞仏教センター元囑託研究員・武田定光）

『歎異抄』試訳〈後序〉その1

原文

右条々はみなもつて信心のことなるよりおこりそうろうか。
故聖人の御ものがたり、法然聖人の御とき、御弟子そのかずおわかりけるなかに、おなじく御信心のひとも、すくなくおわしけるにこそ、親鸞、御同朋の御なかにして、御相論のことそうらいけり。

そのゆえは、「善信が信心も、聖人の御信心もひとつなり」とおおせのそうらいければ、勢観房、念仏房なんでもうす御同朋達、もつてのほかにあらそいたまいて、「いかでか聖人の御信心に善信房の信心、ひとつにはあるべきぞ」とそうらいければ、「聖人の御智慧才覚ひろくおわしますに、一ならんともうさばこそ、ひがごとならめ。往生の信心においては、まったくことなることなし、ただひとつなり」と御返答ありけれども、

現代語訳

右にかかげた八か条（第十一―十八条）の異義は、真実の信心に異なることから起こってきたものであろうか。

いまは亡き親鸞聖人は、かつてこのようなことを話されていた。法然上人がご在世のとき、弟子はたくさんおられたが、その一方で真実の信心に生きるひとは少なかったの、私（親鸞）は、同門の人たちの間で、信心についての論争をしたことがあった、と。というのは、親鸞聖人が「私（善信）の信心も、法然上人のご信心もひとつである」とおおせられたところ、勢観房や念仏房などという同門人たちが、意外なほどに語気を強めて反論し、「どうして法然上人のご信心と善信房の信心がひとつであろうか」と言われたので、「法然上人の知恵や学識が広くすぐれておられるのに、もしそれと私がひとつだというのであれば、それこそまったくの心得違いであらう。しかし往生の信心にあつては、まったく異なることはない。ただひとつである」とお答えになったけれども、それでもなお、「どうしてそのようなことが言えるのだろうか」という疑いや非難があつたので、結局、それでは法然上人の前で、自分と相手のどちらの主張が正しいかを決めることになり、詳しい事情を申し上げたところ、法然上人は「源空（法然）の信心も、如来からいただいた信心である。また善信房（親鸞）の信心も、如来からいただいた信心である。だから、まったくひとつなのだ。もしこの信心と異なる信心の方は、源空が参らうとしている浄土へは、よもや往くことはないだろう」とおおせになられたのである。

『唯信鈔文意』研究会を発足

この研究会は、『唯信鈔文意』研究会と名づけて、2006年9月から月2回のペースで進めています。テキストには『唯信鈔文意』（『真宗聖典』東本願寺出版部。以下、『聖典』と略記）を使用し、順次、読み進めながら、その現代語化（試訳）を行っています。

① ねらい

(1) 『聖典』に親しむ

「現代人が教えの言葉（原典）にふれる契機とする」ことをねらいとした『唯信鈔文意』研究会は、これまで親鸞仏教センターが進めてきた『歎異抄』研究会（『聖典』の現代語化）の精神を継承するものである。親鸞聖人の在世時から800年の時空を超え、その時代に生きる人びとの苦悩にに応じて、生きることの意味を尋ねてきた教えの言葉が、現代人にいまどのような感動をもたらすのか、慌ただしい生活のなかでも『聖典』に親しめることを目指して取り組む。

(2) 『唯信鈔文意』とは

親鸞聖人の著作である『唯信鈔文意』は、同じ法然上人門下の兄弟子にあたる、聖覚法印の著された『唯信鈔』に引用されている経釈の要文に、独創的な解説を施し、仮名で書かれた注釈書である。よって、『唯信鈔文意』は『唯信鈔』の全文を解説したものではないが、両書共に法然の説かれた「選択本願の念仏」に開かれる仏道の要を、「信心」に見ている書である。『歎異抄』第13条には「『唯信鈔』にも、『弥陀いかにばかりのちからましますとしりてか、罪業の身なれば、すくわれがたしとおもうべき』とそうろうぞかし」（『聖典』634頁）と引用されることから、『歎異抄』が『唯信鈔』の感化を受けた書であることが知られる。

② 『唯信鈔文意』の現代語化と構成

(1) 仏教語の積極的な現代語化

『唯信鈔文意』研究会（＝写真）を進めるにあたり、『唯信鈔文意』が『唯信鈔』の注釈書であるという性格上、文章の体裁自体が簡明な表現となっているため、通常では、語尾表現のみの変更にとどまる現代語訳となる箇所が出てくることもあり得る。したがって、原文の響きを大切にしながら、仏教語の積極的な現代語化に力点を置いた試訳を行うことが課題となる。特に、周知されているような言葉をあらためて問い返し、確かめていく必要がある。また、『親鸞仏教センター通信』にこの成果を報告するについては、すでに現代語化を試みてきた『歎異抄』（本紙創刊号から第22号）と同様、①原文、②現代語訳、③語註の構成で進める。

(2) 読者層は

『唯信鈔文意』は、いったい誰に向けて書かれたものであるのか。その奥書には、「いなかのひとびと」とあり、そこに関東のご門徒（同朋）に対する親鸞聖人の温かく、深い配慮が見てとれる。現代に照らしてみれば、「都市生活者」を視野の外にすることはできない。そういう意味でも、読者層については「40歳代のサラリーマン」に焦点を当て、一方で、『歎異抄』の試訳に対する読者のご意見（「現代語訳ではなく、解釈になっているのではないか」等）も受け止めながら、より斬新な現代語化となるよう努める。



●センター新スタッフの紹介

嘱託研究員 田村晃徳

1971年生まれ。立命館大学文学部哲学科卒業。大谷大学大学院博士課程（真宗学）満期退学。博士（文学）。真宗大谷派擬撰。元親鸞仏教センター研究員。前大谷大学講師。現在、武蔵野大学大学院非常勤講師。

書記補 萩野顕

あ と が き

いよいよ今号をもって、『歎異抄』試訳（現代語訳）の掲載が最終になる。現在、新たに『聖典』の現代語化に向けた『唯信鈔文意』研究会を進めている。この報告については、本紙第25号（2008年3月1日号）から掲載の予定である▼本年3月まで大谷大学で講師を務めた元研究員の田村晃徳氏が、4月から当センターの嘱託研究員として任命された。センター設立の最初期に在職した氏は、「清沢満之研究会」の発足をはじめ、「親鸞思想を世に開く」との志のもと、現代と親鸞思想の接点を探り、現代社会に惹起する人間の諸問題に重ね合わせながら、このセンターの活動に新鮮な息吹を吹き込んだひとりでもある。今後の活躍に大いに期待したい▼次年度からの「親鸞仏教センターシンポジウム」開催に向けて、当センターでは、「科学と宗教の接点・つながり・関係」をテーマに、東京大学名誉教授・「場の研究所」所長の清水博氏と合同研究会を始めることとなった。「科学技術の発展は人間に物質的な豊かさはもたらしたが、その陰の面も大きい。まさに近

代文明は、新しい文明へ交替する大きな転換期にある（要略）（『場の思想』東京大学出版会）と指摘する清水氏は、この研究会において、「近代科学は存在論を排除して認識論として成立したのであり、これに対して宗教は存在論である。科学的な問いは認識論の対象に関する問いであるから答えれば終わりがある。これに対して、宗教的な問いは存在論的問い＝自己の存在に対する問いであるから、答えることによって自己の存在自体が変化するから問いを続けなければならない。現代社会の混乱は、存在論的問題を認識論的方法（科学的方法）によって答えようとするところから生まれた」（『合同研究会資料』から）と言われる。そして、この現代の危機的状況を救うのは、これまでの科学（認識論的科学）になかった人間の存在自体に対する問いであり、その意味で、大乘仏教の果たすべき役割は大きい、と。その上で、われわれが恩恵を受けている科学を捨てることなく、科学と大乘仏教の二つを合わせた新たな創造的思想を構築すべき時代がきた、と言明される。思想としての新たな言葉を創造しようという大切な場に同席できることをありがたく思う。（長谷岡）

親鸞仏教センター

検索

shinran-bc.tomo-net.or.jp